生と死を往還した結核闘病生活と悲願の社会復帰への軌跡
＜書評＞大場昇著『わが心のサナトリウム保生園』

結核予防会
専務理事　竹下 隆夫

四六判：272頁定価　1,800円＋税文藝春秋企画出版部発行ISBN978-4-16-008845-0

本書を読みながら「一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し」という言葉が頻りに頭の中で繰り返された。これは福澤諭吉が『文明論之概略』の中で，自分の生涯の半生を封建制の江戸時代に，残りの半生を明治時代に生きた実感を表現した言葉であるが，著者も最後のところでこの言葉を引用し，「現実社会にはいながらも，非日常の世界に住むという二つの人生を同時に生きた」と述懐している。

著者は27歳のとき結核に罹患して東村山の保生園（現：新山手病院）に入院し，片肺のかなりの部分と6本の肋骨を切除する。予後が思わしくなく3カ月後に再手術を受け，30歳で退院して郷里の鹿児島に帰るが，完治せず33歳で再び保生園に入院，再々手術し，ついに片肺を完全に切除する。その後も傷口から大量の膿が出る緑膿菌による膿胸に悩まされ，35歳で退院するも外来に通い続け37歳で3度目の入院を余儀なくされる。そして，後に結核予防会の理事長を務めた長田功医師の手術により膿胸も完治し，10年に及ぶ闘病生活に終止符が打たれた。

著者は「死が日常である世界に久しく身を置きながら」とした闘病生活の中で，「悲観的になって自棄に陥りがちで，無間地獄への穴がポッカリと口をあける闘病の日々は，くり返しくり返し自らを励まし続けないと，魔の山にすむ悪魔に心を喰われてしまう。そうなったら体がダメになる前に，人格が救いがたい荒廃をきたす」という懸念を反芻し続け，生きることの意味を根源的に問い，普遍的な答えを模索し続けている。それらは，顛末を書くべきか否か迷ったという再入院後の「狂気が沸点に達した」異常な体験への言及も含め，幾度となく枕を濡らしたというシューベルトの歌曲集「冬の旅」や多くの先人や古典の言葉に足を止めて，「神に縁のない『絶えざる自己超克』」を続ける宿命を生きた真実の軌跡と言えよう。

また，著者は保生園で手術を受け入院したことのある藤沢周平の「病院生活は私の大学だったと書いたのは少しも誇張ではなく，この時の病気と入院がなかったら，私が今のように小説を書けたかどうかは甚だ疑わしいと思う」という言葉を紹介しているが，それはそのまま，その後にノンフィクション作家の道も歩んだ著者自身の言葉でもあろう。

こうした闘病生活を経て，悲願の社会復帰を遂げた後は，同じく20代の半ばに2度も保生園に入院していた伴侶とともに苦難の末に学習塾を開設して経営者となる。この塾は東村山に本校をおきながら，郷里の鹿児島県鹿屋市にも分校を開き，最盛時は6校舎，生徒数1,000人，教職員120人を数えたというから並大抵な努力ではなかったことが推察されよう。

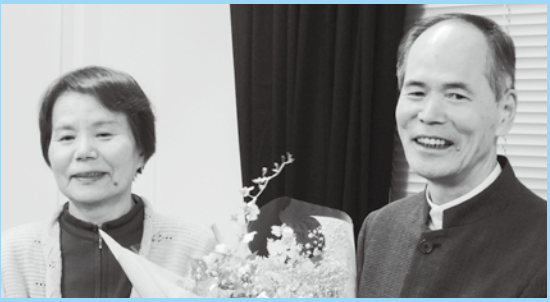
更には，障害を抱えながらも「地球上のどこにでも人間がいて，それぞれの哀歓を抱えて生きている様を目の当たりに」すべく世界各国を訪れることにも挑戦し，その旅で得たいくつかの体験は後に著作の面で活かされ，ノンフィクション作品として結実している。

末尾になるが，本書を結核予防会の役職員全員に一冊ずつ寄贈してくれた著者に改めてお礼を申し上げるとともに，本書が生と死を往還するような稀有な闘病記録でありながら，先人の言葉や音楽を糧にして様々な人生を昇華させる言葉の磁場を有した秀逸なノンフィクション自伝であり，読者に一読をお奨めしたい。

出版記念会が開催されました！

平成27年12月9日（水）グリューネスハイム新山手の集会室にて，大場昇様ご夫妻を囲んで本書の出版記念会が盛大に開催されました。

来賓をはじめ，本会役員，職員，OB，グリューネスハイム新山手にお住まいの方など100名を超える多くの方々が出席され，大場さんは感激のあまりご挨拶で感涙にむせぶ場面もありました。



大場さんご夫妻